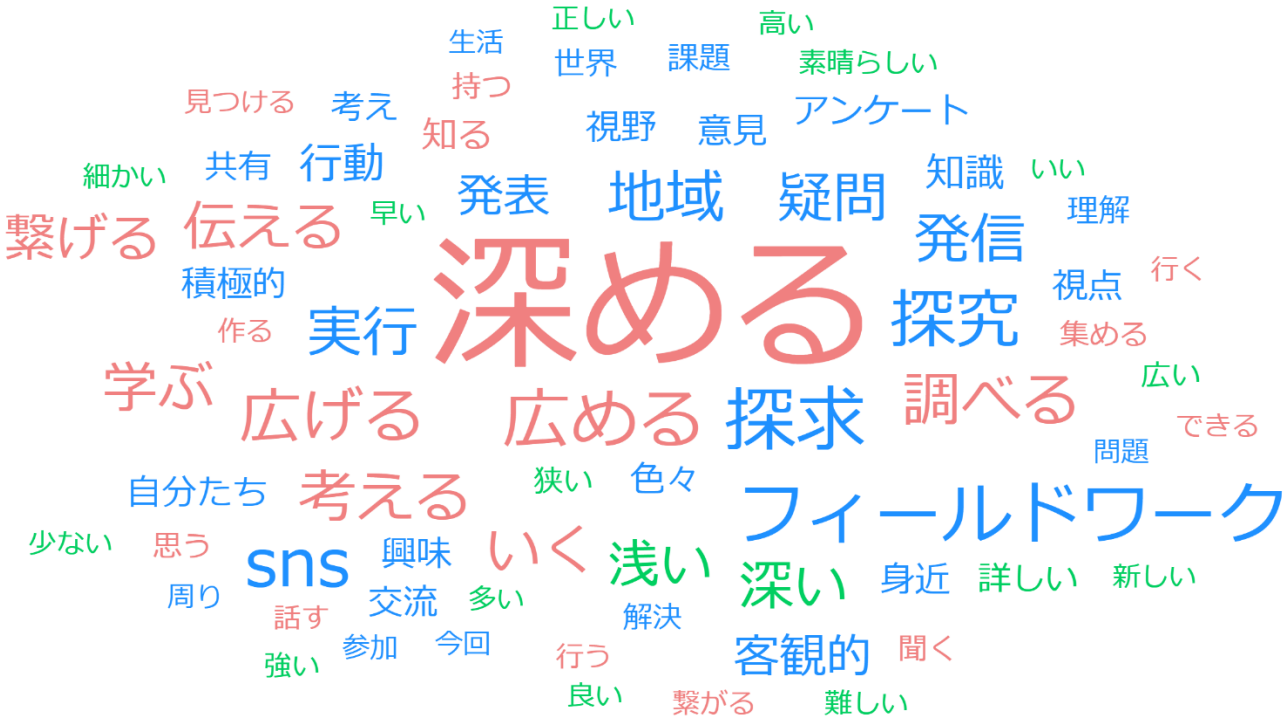
兵庫県立柏原高等学校

2023 年度（令和 5 年度）活動報告集

翔びたて柏高！

～地域での学びを自分の未来へとつなぐ～



丹波から TAMBA へ・自己理解と他者理解の螺旋

地域課題を活用した、「多様な価値観を共有する人材」を育成する教育課程の開発

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

【兵庫県立柏原高等学校】地域科学探究科（令和６年度改編）

丹波からTAMBAへ・自己理解と他者理解の螺旋
地域課題を活用した、「多様な価値観を共有する人材」を育成する教育課程の開発

●柏原高校のミッション
- 地域を支える人材育成
- 全国、世界で活躍するリーダー育成

●めざす生徒像
- 主体的に物事にチャレンジする生徒
- 多様な価値観を理解し、協働する生徒
- 興味関心に基づき新たな知見を獲得する生徒

●地域のポテンシャルを活かし、地域を知る
地域探究を通して自分を知り、
地域に貢献できる力を養う

幼児教育・自然とのふれあい
義務教育・地域学習

共生社会で
行動できる人材

多様な価値観を共有する人材の育成

地域と学校を繋ぐ役割
探究プログラム開発支援
⇒コーディネーター

コーディ ←対話→ 教員

生徒を成長させる
学びのプロ⇒教員

コーディネーター・教職員

大学関係者

地元企業

丹波市教委

地域

生徒

教員
コーディ

丹BAL I（たん バル）　探究の基礎・基本
- 学びの本質を理解
- 先人からの知恵や叡智の教授
- 地域・学問の情報提供
（教員・地域）

多面的・多角的視点を養う

生徒の自己評価
（資質能力ベース）

教職員の自己評価
（専門性の活用・深化）

地域社会の協働評価
（チャレンジできる土壌）

丹BAL II　探究活動の実践
- 興味のある分野を選択
- 地域をフィールドにした実践

思考力・探究力・表現力を養う

丹BAL III　学びの深化
- 多様な価値観の解釈
- 論文作成・発表
（主体的な外部発信）

行動力・発信力を養う

調査・実践

同窓会
卒業生等

地域で生徒とともに学ぶ集団
⇒コンソーシアム

丹波市
海外協力校

NPO法人等 商工会

残り２年間のミッション
○地域の資源を活かした探究の体系化
○学校教職員とコーディネーターの協働体制構築
○生徒の学びに対する意識変容 → 受動的な学びからの脱却

学科＼学年	１年	２年	３年	合計
普通科地域探究科	40	40	40	120
普通科	160	160	160	480

目次

【巻頭言】・・1
兵庫県立柏原高等学校長　荒木 和仁
運営指導委員会委員長　　高畑 由起夫(関西学院大学 名誉教授)

1．実施状況・・3
(1)実施計画…… 3
(2)事業結果説明書……22
(3)研究推進部活動内容……29
(4)新学科（地域科学探究科）の３年間の探究プログラム……31
(5)第１回運営指導委員会……32
(6)第２回運営指導委員会……36
(7)視察受け入れ……40

2．各学年の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
(1)1 学年（探究Ⅰ＆丹 BALⅠ） ……41
(2)2 学年（探究Ⅱ）……45
(3)2 学年（丹 BALⅡ） ……48
(4)3 学年（丹 BALⅢ） ……50
(5)3 学年（グローカル） ……52

3．第１回「知の探究」発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

4．探究成果例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
(1)探究テーマ一覧 ……56
(2)１年「探究Ⅰ＆丹 BALⅠ」……60
(3)２年「探究Ⅱ」 ……61
(4)２年「丹 BALⅡ」 ……62
(5)３年「グローカル」 ……63

巻頭言

兵庫県立柏原高等学校長　荒木和仁

本校では、平成 20 年に「知の探究コース」が設置され総合的な学習の時間において「探究的な学び」をスタートし、特色化を図ってきました。コースの生徒は勉学、部活動、学校行事等を本校の中心的存在として牽引しています。また、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定期間を終えた本校は、令和４年度新たに「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に指定されました。地球規模の視点にたち、多様な価値観を理解しながら、地域課題や魅力に焦点化した地域との協働による探究活動を通して地域社会の持続的発展に寄与し、地球規模で活躍できる人材を育てることを目標としています。

令和６年度からは、新学科である「地域科学探究科」がスタートします。社会の持続的な発展や価値の創造に貢献し、自分の将来に結びつけていく論理的思考力や多角的な問題解決力を身につけ、切磋琢磨しながら進路実現ができるよう学校生活を送ってもらいたいと思っています。本校は、学校が主催する発表会はもちろん、大学や地域で開催される事業にも、積極的に参加し探究の成果を発表しました。この夏・秋のオープン・ハイスクールでも、参加してくれた中学生や保護者の前で探究学習の成果をプレゼンし、さらに自分の出身中学校に出向き、「柏原高校でこんな学びをしている」と発表する機会をいただきました。先輩の活躍は、市内の中学が行っている「アントレプレナーシップ教育」にもつながっているのではないかと思っています。このような発表の場をいただけるということは、自分の足りない部分を知り、改善していくという生徒が成長する大切な機会といえます。これまで柏原高校が積み上げてきた「探究」をさらに深め、生徒の活躍の場を設定できればと思っています。

さて、１年の探究学習「探究Ⅰ、丹 BALⅠ」は、探究活動の基礎・基本を習得することを目標とし、探究対象を身近な地域社会の課題に絞り、地域の抱える課題魅力を探究し、気づきを発信・共有するため、地元講師の先生方等の力もお借りしながら進めてきました。２年生の「探究Ⅱ」や、「丹 BALⅡ」では、探究活動の地域実践のため、１年生での学びをさらに発展させ、自らテーマを設定し、自分が最も関心がある地域社会を支える事柄について個人研究を進め、校内での発表のみならず、地域や大学等での発表会にも参加し、丹波の課題や魅力を発信するとともに、今後の課題の明確化や学びの発展を実践しました。そして、３年生の「グローカル」では、課題研究の深化を目的として、調査分析、論文作成等にも取り組むことで、さらなる国際交流、探究的な学びの継続を図るため、この３年間の探究活動の集大成として取り組んでくれました。

これまで本校が培ってきた取組を、探究的な学びの「柏原モデル」として発展させていくとともに、魅力ある新学科のスタートに職員全員が全力で取組んでいきます。

最後に、本校の探究活動の発展、本事業の推進および新学科のスタートにあたり、ご支援、ご協力をいただきました文部科学省、関係大学、県教育委員会、丹波市、地域の皆様、同窓会の皆様に厚くお礼を申し上げます。今後とも、魅力ある柏原高校の推進に引き続きご協力、ご助言をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

国際的視野を踏まえながら地域に根差したグローカルな教育に期待いたします

高畑由起夫（関西学院大学名誉教授）

柏原高等学校では、平成 26 年度からの SGH アソシエイト校、そして平成 31 年度からの「地域との協働による教育改革推進事業（グローカル型）」等での実践を通じて、カリキュラム研究開発やコーディネーター制度の整備等に取り組んでこられました。それらの成果を踏まえて、令和６年度には地域科学探究科のスタートが予定されています。こうした一連の試みは、地域と中等教育の有機的な連帯によって、高校生の主体的な学びを醸成する先進的取り組みであると高く評価できます。何よりも、柏原高校がおかれている地理・歴史的条件（120 年を超える歴史と教育実践や、周辺地域に豊かな地域財産や伝統文化があること等）を活かしながら、地方創成が直面する様々な課題に対応する素晴らしい試みと言えるでしょう。大学での教育現場からも、こうした学びの場で経験を積まれた生徒の皆さんの入学に大きな期待を寄せることができます。

もちろん、こうした独創的な試みは今後、さらに様々な課題に直面するかもしれませんが、教員・コーディネーター、そして地域の皆様のご努力でクリアしていただけるものと思います。まず、大きな課題としては、活動報告集の実施計画でも言及されているように、コーディネーター制度の確立とそれにともなう自治体・地域住民の連携強化、とくに市や県によるコンソーシアムへの積極的な係わりが必要です。一方で、地域から高校教育へのインプットに応えるためにも、高校から周辺地域への発信＝アウトプットの仕組みづくりが重要になってくるでしょう。さらに視点を広げれば、柏原高校のみにとどまらず、地域社会全体を考え、周辺の他教育機関（中学校や他の高等学校等）との連携も考えなければいけません。

もう一つの大きな課題は“グローカル”な視点を生徒の皆さんや教職員、さらに学校をとりまく各種のステークホルダーの方々に共有していただくことでしょう。地域科学探究科のスクール・ポリシーに「丹波から世界への視点を持ち、探究活動を通して多様な価値観を理解する」とあるように、地域はそれだけで完結しているわけではありません。グローバルあってのローカルであり、同時にローカルがあってのグローバルです。丹波地域の特性を、日本及び海外の方にどのように発信できるか、逆に、日本のみならず世界から収集した情報をいかに丹波地域に還元できるのか、ふだんから意識していくことが求められます。

探求学習に関する今後の課題としては、リサーチ・プレゼンにとどまらず、ディスカッション能力の向上が挙げられます。これまでの探求学習ではリサーチやプレゼンのスキルを磨くことがまず重要な課題だったわけですが、その次のステップとして、他の方の発表を理解し（読解力が必要です）、そして質疑を交わす（こちらは表現力が必要です）ことで、議論する前にはどちらも気付いていなかった新発見に気づく双方的コミュニケーション能力の向上です。なお、そこでは当然、英語等を用いたディスカッション能力、とくに司会や質疑応答も含めた総合的な英語コミュニケーション能力が期待されます。

一方で、Web 社会の急速な発達によって多くの情報に簡単に接することができるようになった反面、フェイクニュースに代表される誤った情報に惑わされたり、過剰な情報を処理しきれなかったりする局面が、今後さらに増えていくかもしれません。必要かつ正しい情報をいかにして集めることができるかという情報リテラシーとともに、その情報を正しく解釈するためのデータ・サイエンス能力もますます必須のものになってくると思われます。

これらの教育スキルについて、あるいは、先生方だけではカバーしきれないところが出てくるかもしれません。そのためにも、大学等の高等教育機関や、120 年余の歴史をふまえた卒業生の方々との連携・ネットワーク形成が重要になってくると思われます。

以上、あまり脈絡もなく書き連ねましたが、最後にあらためて、これまでの教育改革のご努力と成果を高く評価するとともに、今後の発展について期待するものです。

１．実施状況

(1)実施計画

〔事業の概要〕

○学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・国立・株立の別	学校名（ふりがな）	学科の種類	設置（予定）年度	決定
公立	兵庫県立柏原高等学校（ひょうごけんりつかいばらこうとうがっこう）	地域社会学科	令和６年度	○

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科の別を記載すること。
※設置（予定）年度は令和４年度、令和５年度又は令和６年度を記載すること。
※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

○学校の詳細

課程別	新学科の収容定員	学年制・単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	40×3 学年＝120 人	学年制	

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

○学校の特徴

創立 125 年の伝統があり、４万を超える卒業生は日本各地をはじめ世界で活躍するとともに、多くの卒業生が地元の教育、医療福祉、地元産業を中心的に支えている。本校の使命として、少子高齢化、過疎化が進む地域を支える人材を育成するとともに、地域課題の解決に向けて主体的にチャレンジする生徒の育成することが求められている。

○研究開発の概要

地域のポテンシャルを活かし、地域資源を活用した地域を知る学びから学ぶ楽しさを知り、自分の興味ある分野の探究活動を進め、多様な価値観を理解したうえで外部へ発信していくという活動を中心とする。そのために、学校職員とコーディネータとの協働体制を構築し、持続可能な校内体制を整える。そして、生徒が多様な価値観を理解し、共生社会で行動できる人材となるために「自己理解」と「他者理解」をテーマにした学びのカリキュラムはどうあるべきかを研究する。

○当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

現在の取組みと改編後の科目名称

	知の探究コース→地域科学探究科	普通科一般クラス
１年	探究Ⅰ（１）→丹 BALⅠ（１）	丹 BALⅠ（１）
２年	探究Ⅱ（２）→丹 BALⅡ（２）	丹 BALⅡ（１）
３年	丹 BALⅢ（２）	総合Ⅲ（１）
	グローカル・(仮)自分探究・(仮)地域探究（選択各２）	

（　）は単位数

「総合的な探究の時間」を本校独自のものとするため、①地域から学び地域で活動することを「丹波る」と動詞化、②グローカル（GLOBAL＋LOCAL）を言い換えて「ローカル」＝「丹波」から「丹 BAL」、③「丹波で Be A Leader」、④「丹波で Best Achievement Learning」という願いを込めて「丹 BAL」と呼ぶ。

【探究の基礎・基本】１年次「丹 BALⅠ」

探究対象を身近な地域社会の課題にしぼり、地域の抱える課題、魅力を探究し、気づきを発信・共有する。丹波市役所、市教育委員会、また地域で活躍している方々教員の得意とする学問をテーマに、今日的な課題や地域社会のニーズ等を知り、自らの興味あるテーマを探す授業。

【探究活動の地域実践】２年次「丹 BALⅡ」

テーマの変更を認め、「地域課題の探究（１年の継続）」に加え、研究の切り口として「自分探究（自分が最も関心がある地域社会を支える人材：教育、看護医療、公務員、起業している方等が、地域社会にどのように働きかけ、社会が形成されているか学び深める活動）」につながるテーマを研究する。自分が研究する目的を明確にし、地域をフィールドに１年時の探究活動を深める。中学校やオープン・ハイスクールで地域の後輩と学びを共有し、協働する人材育成に携わる。自分の探究テーマからモデル論文を確定し、本テーマの論文構成を考え必要なデータを収集、成果物を作成する。

治平高級中学､台南第一高級中学など海外で暮らす同年代の若者とオンラインで交流する。自己紹介、学校紹介地域の紹介を互いに行うことで、２者間における差異の気づき、差異を生む背景の考察など比較研究に必要なモノの見方・考え方を獲得する。リサーチフェスタ、マイプロジェクトアワード、グローカルサミット等、研究報告を公表し、今後の課題の明確化と学びの深化を目指す。

【学びの深化】３年次　「丹 BALⅢ」

２年の探究をさらに継続・発展させたい生徒が、それぞれの課題や進路に応じ、世界へ発信（グローカル）、自分の進路へとつなげる（自分探究）、地域課題の解決へ向けさらに研究を進める（地域探究）とし選択できる科目として設置する。

英語によるプレゼンテーション、ディスカッションに対応できる技能を磨き、海外の高校生（台湾、韓国、カンボジア等）とオンラインで情報発信、意見交換をして学びを深める。海外及び全国の地域探究型の高校とオンラインで結び、グローカルサミットを開催。

「地域課題から世界を考える日」（全校発表会）

総合的な探究の時間、「丹 BALⅠ」「丹 BALⅡ」「丹 BALⅢ」でまとめた探究活動の成果を発表する。オンラインで発信する。

今後、地域人材育成のための探究活動、地域づくり、魅力発信、ふるさと教育をテーマに新たな科目を設定する。知の探究コースにおける探究の名称を普通科と同様の「丹 BAL」と名称変更し、学校全体の学びの共通項として位置づけ、地域科学探究科では、学びの質の向上とさらなる教科横断的な学びの体系化を図る。

〔事業の目的等〕

（１）学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要性

本校の所在する丹波地域は、現在少子高齢化、過疎化、医師不足、基幹産業である農業の衰退、森林の放置、それを遠因とした土砂災害の発生、農作物への鳥獣被害など様々な今日的課題を抱えている。

一方、丹波地域には、豊かな自然や景観、歴史、あるいは丹波大納言小豆や黒大豆など、日本を代表する農作物や、世界的にも珍しい恐竜の卵殻化石が発掘され大きな話題となった地層（丹波篠山層群）など、世界に誇るべき地域財産を有している。

本校は、地域の進学校として、126 年の歴史があり、卒業生も４万人を超え、多くの人材を世界に発出してきた。最大 2000 人を超える生徒が学び、丹波地域はもちろん、世界各国で活躍している。しかしながら、少子高齢化の影響は大きく、最大１学年 12 クラス規模から５クラス規模へと生徒が半分以下に激減し、丹波地域の人口も減少傾向にある。

一方で、丹波市では、世界ブランドの農作物等の地域資源に魅力を感じ、丹波地域への移住者数は、令和２年度には 225 人と前年度から 100 人も移住者が増加している。新たなビジネスを展開している方や自分らしい生き方を求めている方などの多様な価値観が共存している。

平成 20 年に本校は学校の特色であった「普通科理数コース」を文系対応も可能な「知の探究コース」として改編、探究活動を教育課程の中に盛り込み学校の特色化を図ってきた。本校が探究活動で培ってきた、地域との協働した学びは、生徒の主体的な学びの場となり、学校が活性化する源として、本校の中心的な活動として現在まで牽引してきた。

具体例をあげると、新型コロナウイルス感染症が拡大するなかで、実施した教育活動は以下となる。感染拡大を防止しながらの取組ではあったが、地域の方から多くの喜びの声が聞かれた。

【具体的な取組】令和４年度実績

・パートナーシップ制度を丹波市にも取り入れよう
・丹波市における学校給食を活用した有機農業の推進
・少子化における丹波市の特別支援教育
・丹波三宝を題材にフィールドワーク等の実践的な学びを展開
・車いすユーザー用柏原市街めぐり観光マップの日本語版・英語版の作成

この度のパンデミック以外にも、急速なグローバル化や ICT をはじめとする技術の進展や少子高齢化の影響等、ますます変化が激しく予測困難な時代を迎えている中で、社会の変化に柔軟に対応し、自らの力で新しい社会を切り拓く力を育成する高等学校であるために、地域との協働による高等学校教育改革推進事業により実施した研究開発を継続し、発展させる必要がある。これからも、丹波市が、豊かに生きることができる地域であり続けるために、高校生が中心となり、地球規模の視点に立った地域課題・魅力に着目し、地域社会の持続的な発展や価値の創出に資する資質能力を育成していく。

そのために、現コースの培ってきた学びの進化系として、本質的な協働と個人の行動を重視した新学科「地域科学探究科」として、「多様な価値観を共有する人材育成」を目標に、丹波地域をフィールドとした、地球規模で活躍する人材を育むことが本校の使命であると考える。

（２）学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

①柏原高校のめざす生徒像
・主体的に物事にチャレンジする生徒
・多様な価値観を理解し、協働する生徒
・地域の課題解決に寄与する生徒

②取組の目的・目標
・地域課題を理解し、地域活性化や課題解決に向け積極的に関わることのできる資質能力を養う。
・他地域との比較や、世界的な課題との関連を探る活動を通じて多様な価値観を理解できる資質・能力を養う。
・生活体験や地域での学び、交流から、他者と自分の差異に気づき、差異を生かす方法を考えることができる資質・能力を養う。

③育成を目指す資質・能力
コア教科・科目「丹 BAL」で課題解決型学習を推進し以下の力（例）を育成する。

	丹 BAL Ⅰ	丹 BAL Ⅱ	丹 BAL Ⅲ
地域理解力	◎		
発案力	◎		
実践力		◎	
関係構築力	○	◎	
表現力	○	◎	◎
チャレンジ精神		○	◎
リーダー性		○	◎

※新学科準備として、コーディネーターを中心に教員や地域の方と育成したい能力を検討する。
想定する内容　地域理解力：主体性・好奇心・創造力など
発案力：分析力・考察力・企画力など
関係構築力：発信力・巻き込み力など

④カリキュラムマネジメント
コア科目を中心とした各教科の学びの設計において以下の内容を実践する。
〈特に育むべき資質・能力〉
・答えが一つとは限らない問いに対し、自ら解を求める思考力、判断力、表現力等の能力
・主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）
〈年次進行〉
１年次　課題と設定と分析　　２年次　解決策のための立案と実行
３年次　キャリア形成へのさらなる行動
〈課題解決型学習の設計〉
教育目標からの目指す資質・能力の設定→評価の目的と方法の設定→
授業計画の作成→授業案の作成と授業の実施方法の検討→
授業関係やの役割の明確化
学校の教育活動全体を見据え、これらの内容を教員間で互いに確認できる、対話を重視したシステムを構築する。

〔実施体制〕

（１）管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施に向けた経緯】

本県では、「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づき、県立高等学校に関する具体的な取組の考え方と方向性を示す「県立高等学校教育改革実施計画」を策定し、計画的に教育改革を進めてきた。

具体的には、「第一次実施計画」策定（平成 11 年度）以降、「学びたいことが学べる学校づくり」を一貫した基本理念とし、特に、普通科学年制においては、コースの設置に加え、複数の学校設定科目を設定し、生徒の興味・関心を重視した入試を行う本県独自の特色類型を設置してきた。この結果、専門学科の併置校を除く全ての普通科学年制高等学校にコースまたは特色類型のいずれかを設置するに至っている。（コース 15 校、特色類型 55 校）

普通科新学科については、今年度末（令和４年３月）策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、設置の方向性を明確に打ち出すとともに、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進することとしている。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの内、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数次にわたって調整を進めてきた経緯があることから、２校を申請することとなった。

なお、普通科新学科の設置時期は、令和４年度中に入試方法を含めた検討を行った上で公表し、１年間の周知期間を設けることから、令和６年度としている。

【事業の実施体制】

①「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」の設置
- 普通科新学科の設置を目指す高等学校（10 校程度）を構成員とする「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」を、高校教育課主導で設置
- 定期的に会議を開き、各校の改編に向けた進捗状況を確認するとともに、課題や解決策等を共有
- 本事業指定校には、モデル校として中心的な役割を付与

②本事業指定校が開催する運営指導委員会等への参画
- 本事業指定校の運営指導委員会等に、高校教育課長が委員として参画

③本事業指定校に対する県独自の支援
- 探究活動に特化した特別教室の整備（ICT 環境等の充実）
- 担当指導主事による継続的な指導助言

④普通科新学科に関する周知
- 普通科新学科の特長等に関する組織的な広報の展開（HP 等の充実）

【事業の管理方法】

①本事業指定期間中
- 運営指導委員会における進捗状況の把握及び指導助言
- 「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」における報告の義務化

②本事業指定終了後
- 普通科新学科設置後の成果報告を義務化
- 本事業終了後の人的配置の検討

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業評価の体制】

①運営指導委員会での検証
- ・高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な評価及び指導
- ・外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価
- ・大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価

②コンソーシアムでの検証
- ・高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な関与及び助言
- ・コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価
- ・校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価

③「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」での検証
- ・普通科新学科設置を目指す高等学校を構成員とする委員会での相互評価
- ・指導主事による各校の成果に関する相対的な評価

④兵庫県教育基本計画にもとづく検証
- ・「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づく年度末評価の実施

【事業評価の考え方・観点】

①スクール・ポリシーの適切な設定
- ・生徒に身につけさせる資質・能力の明確化
- ・資質･能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化
- ・入学時に期待される生徒像の明確化

②育成するべき資質・能力に関する評価方法の適切な設定
- ・生徒の目標に対する到達度（ポートフォーリオ、ルーブリック等）
- ・生徒の興味・関心・意欲等に関する教職員の理解度
- ・生徒や教職員、協働者に関するコーディネーターの理解度

③３年間を通じた体系的なカリキュラムの設定
- ・教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定
- ・学校設定教科を軸とした、探究活動中心のカリキュラムの設定

④ICT 等を活用した授業設定
- ・BYOD をはじめとする情報端末機器を有効に活用した授業の展開
- ・急激な社会変化等に影響を受けにくい学習環境の構築

⑤コーディネーターの有効な活用方法の検証
- ・コーディネーターの得意分野を生かした学校組織での活用
- ・コーディネーターによる研究機関や地域社会との接続点の増加
- ・コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制の構築
- ・コーディネーターの関与によるワークライフバランスの組織的な担保

【具体的な評価指標(例)】

高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒の割合

【第３期ひょうご教育創造プラン指標】

区　　分	Ｒ元年度 実績	Ｒ２年度	Ｒ３年度 見込	Ｒ４年度 目標	最終目標 【年度】
目標	82%	83%	84%	85%	86%
実績(見込)	81.0%	82.5%	79.3%	(85%)	【R5 年度】

（３）学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方法

①校内組織の改編
・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化
・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実
・職員会議等において、事業内容に関する情報を共有化

②普通科新学科設置準備委員会の設置
・普通科新学科設置に向けた委員会を校内に立ち上げ、コーディネーターを含む委員により、組織的に改編を推進

③運営指導委員会の開催
・運営指導委員会を年間２回程度開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者や自治体関係者、地域 NPO 等の委員から助言を受けながら、校内の教育活動に対して進行管理、評価、指導を実施
・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言の実施

④コンソーシアム委員会（学校運営連携協議会）開催
・コンソーシアム委員会を定期的に開催し、カリキュラムについて、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築
・探究活動に関する情報やデータの提供や、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学びや ICT を活用した海外との交流の機会を提供
・カリキュラムの実施にあたって、必要に応じて、人的、物的な支援を展開
・実行されたカリキュラムの成果に関する定期的な報告を受け、必要な助言を付与
・普通科新学科としての特色ある教育課程の推進のため、各種分野において優れた知識・技能を有する社会人等を　学校設定教科・科目、総合的な探究の時間等の講師として活用する特別非常勤講師を配置
・本県知事部局の国際交流課・国際経済課等との協力のもと、指定校と国内の大学や企業、海外の教育機関との連携強化や、本県 SSH 指定校等で組織する「兵庫『咲いテク』事業推進委員会」との連携を推進する事業の支援・拡大及び成果の普及を展開

※①～④を関連付けることにより期待される相乗効果
・探究活動は、専門的かつ広範囲的な内容を伴うことから、従来の高等学校の教育環境のみでは効果的な実施が困難な状況であるが、多方面の専門家や組織が、事業実施校の教育目標や実施内容に関する情報等を共有することにより、人的支援及び物的支援等を受けやすくなり、内容の深い学びを機能的に実現する可能性が高まる。
・生徒が個々に発案して進める探究活動を、校内外の様々な場面で公開していくことにより、生徒の課題意識が社会全体の課題とリンクしやすくなり、より大きな支援等を得た教育活動となり得る可能性が高まる。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

管理機関における研究開発の実績〕

学校名	指定年度	指定機関	研究主題
神　　戸 長　　田 尼崎小田 宝 塚 北 三田祥雲館 明 石 北 加古川東 小　　野 姫 路 西 姫 路 東 龍　　野 豊　　岡	平成 16～令和４年度 令和４～令和８年度 平成 17～令和元年度 令和元～５年度 平成 21～令和３年度 平成 22～令和元年度 平成 18～令和３年度 令和元～５年度 令和２～令和６年度 令和２～令和６年度 平成 25～令和４年度 平成 18～令和３年度	文部科学省	スーパーサイエンスハイスクール 将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を指定し、理数系教育に関する教育課程等に関する研究開発（実践的な研究を含む。）を行う。
姫 路 西 兵　　庫 伊　　丹 国　　際	平成 26～平成 30 年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度		スーパーグローバルハイスクール グローバルな社会課題を発見、解決できる人材やグローバルなビジネスで活躍できる人材育成するため、質の高いカリキュラムの開発・実践を行う。
兵　　庫 生　　野 柏　　原 佐　　用 村　　岡	令和２～４年度 令和元～３年度 令和元～３年度 令和２～４年度 令和２～４年度		地域との協働による高等学校教育改革推進事業 市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う。

〔申請校（兵庫県立柏原高等学校）における研究開発の実績〕

平成 26 年４月～平成 31 年３月
　スーパーグローバルハイスクールアソシエイト校に指定
平成 30 年４月　ひょうごスーパーハイスクール指定
平成 31 年４月～令和４年３月
　文部科学省「地域との協働による教育改革推進事業（グローカル型）指定

（５）運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
兵庫県立人と自然の博物館館長	中瀬　勲	学識経験者
関西学院大学　フェロー	高畑　由起夫	学校教育に専門的知識を有する
福知山公立大学　准教授	杉岡　秀紀	〃
東京大学大学院　教授	藤江　康彦	〃
丹波市観光協会　会長	柳川　拓三	関係機関の責任者
丹波市ふるさと創造部総合政策課政策係長	荻野　雅文	関係行政機関の職員
兵庫県教育委員会高校教育課課長	新谷　浩一	管理機関

（６）運営指導委員会が取り組む内容

年間２回程度運営委員会を開催し、各委員の専門性を生かして、令和４・５年度は、新学科設置に向けたカリキュラム開発、コーディネーターと協力した校内の体制整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報等の進捗状況、中学校等への広報活動等について助言を行う。令和６年度は、学科の設置年度となるため、入学生の状況等を把握し、カリキュラムの実施や関係機関との連携の深化等について、具体的な助言を行う。また、学校内外の継続的な連携・協働構築に向けての具体的な提案を行う。

〔学際領域学科又は地域社会学科における取組〕

（１）学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添１「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

１年「丹 BAL Ⅰ」

国内外の地域の課題をテーマに設定する。まずは、丹波市役所、丹波市教委等の協力を仰ぎ、丹波地域の抱える課題、魅力等について探究を進め、地域の魅力について理解を促す。また、コンソーシアムや卒業生等の協力を得て、地域や丹波を応援し活躍している方を講師として召喚する。また、学問分野として教員の教科専門性を活かす授業も展開し、生徒への様々な情報提供を行う。

２年「丹 BALⅡ」

１学年で学んだ内容で、自らの興味ある内容を班選択する。テーマの変更を認め、地域課題の探究（１年の継続）や「自分探究（地域人材の育成、教育、看護医療、公務員、起業等をテーマに探究）」の大テーマから小テーマに展開し、その調査研究のためにコンソーシアムや卒業生等とつながり、実社会で活躍している方と授業展開を行う。

（想定される具体的な学びの内容）

・台湾の学生と本校生徒の地域課題を調査研究
・移住者とともにアントレプレナーシップについて調査研究
・外国人移住者が住みやすい地域にするための調査研究
・丹波市内における特別支援教育の現状調査研究
・丹波市の大腸がん罹患率の比較研究
・地元の河川における生物に配慮した環境作りの調査研究　等

「ポスター英語(仮)」「丹 BALⅡ」でまとめた研究を英語で発信できるようにまとめる。

３年「丹 BALⅢ」の中で選択

「自分探究(仮)」　キャリアデザインのための探究活動
「地域探究(仮)」　地域活性化策の提案（オール丹波構想）地域づくり
「グローカル」　海外訪問やオンラインによる相互の課題の解決策を実践

１年次２年次の課題解決型学習により、自らの将来設計（キャリア）に位置づけた学びの展開を行う。主体的な学びの推進のために、生徒が希望する分野の班設定を行い、学校設定科目等で補完的な学びを展開する。

（想定される具体的な学びの内容）

・海外の高校生（台湾、韓国、カンボジア等）と地域課題をテーマに協働研究
・移住外国人との共生するためのイベント企画
・丹波の３高校が地域を活性化させる「架け橋プロジェクト」の研究
・丹波市内の学校給食をすべて地元有機野菜で作る
・総理大臣になるための方法
・丹波市から宇宙ロケットを飛ばす実験　等

「数理情報処理(仮)」調査研究におけるデータの処理、活用方法の研究

学びの集大成発表の場として「地域課題から世界を考える日」

総合的な探究の時間、「丹 BAL」「探究Ⅱ」「グローカル」等でまとめた探究活動の成果を発表する。オンライン等で発信する

（２）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

これまでの探究活動からの協力体制を発展させる。新学科では生徒の興味ある課題に対して、持続可能な取組とするためにコンソーシアムやOBのつながりを活かした協働体制の構築を目指す。令和４年度より兵庫県版コミュニティスクールの地域連携強化校として指定を受け、学校運営協議会を立ち上げることとなり、その構成員はこれまでの探究活動で協力いただいたコンソーシアムの構成員から選出している。

①生徒の教育活動の支援体制

生徒が探究活動を進めるにあたり、地域の状況や課題、情報共有、講演会、フィールドワークの対応などで協力、支援する。また、課題解決型学習時に解決するための専門家や組織等につなげ、協働した取組により解決できる体制を目指す。

（自治体・商工会・観光協会等）

・丹波市の姉妹都市（米国ワシントン州ケント市・オーバン市）との高校生地域活性化会議及び交換留学の実施

・各機関からの研究テーマに関する情報、データ等の提供

（海外の大学、高校、ＮＰＯとのコンソーシアム）

・国際交流の推進、観光振興に関する研究

・ICTを活用した共同研究　など

②地域探究の教育活動が持続可能な体制

地域活性化の視点を共通項とし、関係者の利益を尊重した持続可能な体制を作る。

・自治体の地域活性化政策や地域おこし協力隊等の継続的な人的支援の検討

・企業の社会貢献事業（CSR）等の人的物的支援の検討

・実践活動を生徒自らで実現する方法の提案（クラウドファウンディング等）など会議を定期的に実施し、新学科設立までに方向性を明確化する。

（３）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
丹波市	林　時彦	丹波市長　探究授業講師派遣
丹波市教育委員会	片山　則昭	丹波市教育長　職員研修会支援
丹波県民局	今井　良広	丹波県民局長　探究活動支援
丹波市商工会議所	篠倉　庸良	会頭　探究活動講師
丹波市観光協会	柳川　拓三	会長　探究活動講師　運営指導委員
丹波医療センター	秋田　穂束	院長　医療セミナー講師
丹波市国際交流協会	山口　直樹	会長　国際交流の支援
福知山公立大学	杉岡　秀紀	准教授　カリキュラム開発 運営指導委員
地元NPO団体	戸田　幸典	探究活動講師　コーディネータ派遣
兵庫県教育委員会	新谷　浩一	高校教育課長

（４）配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名(役割)
NPO 法人 imagine 丹波	鴻谷　佳彦(探究授業推進・職員研修・関係機関調整)
丹波市市民活動支援センター	一宮　祐輔（職員研修・関係機関調整）
神戸学院大学	久保　哲成（探究授業推進）

当該者の主な実績

NPO 法人 imagine 丹波　鴻谷　佳彦
　・文部科学省での運営指導委員
　・探究活動における特別非常勤講師（県内４校実績）
丹波市市民活動支援センター　一宮　祐輔
　・探究活動における特別非常勤講師
　・丹波三高校によるモンブランプロジェクトの支援活動コーディネーター
神戸学院大学講師　久保　哲成　昨年度まで本校の探究担当

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態）

１年目
　学校職員やコンソーシアム等の地域関係者との関係づくりを優先に令和６年度の新学科設置に向けた準備ならびにコーディネーターの役割を明確にする。
　①地域や学校の抱える課題の言語化、可視化、共有化
　②コアとなるチームの編成
　③推進体制づくりの原案づくり
　④丹 BAL を中心とした教科科目の参画授業を試験的に実施し、教科間連携を強化する。

２年目（鴻谷氏、一宮氏は１日７時間 52 日、久保氏は１日 4.5 時間 104 日の勤務を予定）
　１年目の課題を解決する。学校内での意思決定を促し、先生方の主体性を高める仕組みを実践する。特に丹 BALⅡから丹 BALⅢの授業体制・設計を中心としたカリキュラムマネジメントを教員とともに作り上げる。
　①校務分掌の再編成（主：鴻谷、副：一宮）
　②コアとなるチームの編成から学校全体に対話を拡大（教員研修等）（主：鴻谷、副：一宮・久保）
　③関係機関との細かな調整（主：一宮、副：久保）
　④学校外での学びの醸成を推進（主：久保・副：一宮）

３年目
　新学科の設置
　コーディネーターの役割が明確化
　仕組みと文化づくり

　今年度は非常勤とするが、今後は学校に常駐して、教員とともに関係機関との調整、授業において教員、生徒の支援を行う。また、学校内外の協働体制を設計する中心となる。

（５）学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

地域社会学科の設置は令和６年度であるため、以下の広報活動を令和５年度に行なう。

①学科の教育内容をまとめた広報用リーフレットとポスターの作成

中学生や保護者、地域の方に対して、教育活動や行事等を整理し紹介する。また、同時に教育活動に関わっていただけるよう理解を促す。

ポスターの掲示には、学区内の駅やスーパー、公民館、商業施設等の多くの方に周知できる場所を選定して掲示する

②オープン・ハイスクール等（中学生、保護者、地域への広報）

年間３回実施

第１回　７月　中学校訪問　生徒が出身中学校へ出向き、現在行っている探究活動の実践を発表する。あわせて、学校紹介を行う。

第２回　８月　オープン・ハイスクール・新学科説明会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動等、高校の学びについてパネルディスカッション、国際交流について、先輩と語るなどを企画し、学校を紹介する。生徒が説明する。

第３回　10 月　秋のオープン・ハイスクール、進学相談会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動の紹介、高校生と語ろう（進学相談）を行う。

③スマートフォン向け WEB ページの作成

今後の教育活動を紹介できるようなサイトとして業者委託をする。

④学校関係者への説明

３月　入学者説明会（新入生、保護者への説明）

４月　PTA 総会での説明（保護者への説明）

６月　中高連絡会（中学校教員への高校説明）

７月　学校評議員会

９月　学校説明会（中学生、保護者、中学教員への高校説明）

⑤発表会での説明

12 月　探究中間発表会

１ 月　地域課題から世界を考える日（校内発表会を保護者、地域にも公開）

〔実施計画〕

（１）３ヶ年の実施計画の概要

１年目

現行の内容について、継続実施。

①１年生については、新たなテキストや講演会等により探究の手法を学ぶ。

・外部講師による丹波の魅力再発見　自治体の施策を学ぶ（地域を知る）

・地域の魅力や課題の中から、自分の興味あるテーマを設定し、フィールドワーク等の活動から探究を深めていく。

②２年次の探究活動を、前半は１年次からの継続で地域活性化策のまとめ(地域を深め創る)、後半を台湾（沖縄）研究として、テーマを防災、観光、平和等に設定し探究を進める。自治体の対応の違いを比較する。また、地域課題や自己の将来に向けて研究を進める。

③学校設定科目の研究「(仮)自分探究」「(仮)地域探究」「グローカル」を設定。

新たな科目設定であるので、新学科設置検討委員会(仮)により現在の教科の授業との関連をどのような形で行うか、また、総合的な探究の時間や、LHR 等で行っている内容とも関連させ、実施する時間を適切に設定できるように研究する。

また、カリキュラム開発について、コンソーシアムである大学、県教育委員会等との連携し、指導助言を受ける。学校行事（オープン・ハイスクール、修学旅行、進路探究 WEEK、インターンシップ、地域人材養成セミナーなど）との関連もはかり事前事後の学習につながるよう探究学習をプログラムする。

２年目

①同一の曜日(木曜)に探究の時間を設定。LHR の時間と連続にして、課題研究、レポート作成、フィールドワーク、講演会、発表会等が実施しやすい形にする。

②令和４年度に整備した「探究ルーム」を効果的な活用を目指し、探究ルームの積極的な活用を行う。また、より効果的な探究活動が行えるよう、「探究ルーム」の整備を計画的に行う。

③新学科の教育課程の枠組みを決定　全体計画作成、内容検討

④丹 BALⅢ「(仮)自分探究」「(仮)地域探究（地理探究）」「グローカル」の研究

⑤学校設定科目「(仮)ポスター英語」「(仮)数理情報処理」の研究

⑥県教育委員会へ学校設定科目の届出

３年目　新学科設置初年度

①１年次より「地域科学探究科」スタート

②関係機関の連携協力による新たなカリキュラム（初年度：１年生）の実施

③新たなカリキュラム実施（２年生・３年生）に向けての校内体制の準備

（２）令和５年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
４月	探究学習ガイダンス（１年）	丹波新聞社
５月	地域連携講師の授業（２年コース） 授業公開週間、研究授業	地域の関係機関等 丹波市、丹波篠山市教育委員会、中学校
６月	全国コーディネーター研修	
７月	出身中学プレゼンテーション 学校運営協議会（コンソーシアム委員会） 運営指導委員会	丹波市、丹波篠山市教育委員会、中学校 市役所、大学、地元企業、観光協会、商工会議所等 学識経験者、関係行政機関等
８月	オープン・ハイスクールでのプレゼン インターンシップ フィールドワーク引率 職員研修会 カリキュラム開発会議 探究ルームの整備充実	丹波市・丹波篠山市教育委員会、 小学校、中学校、子育て支援センター 地元企業、観光協会、商工会議所等 大学 福知山公立大学、関西学院大学、東京大学等 探究活動での活用
９月	地域連携講師の授業（１年） 地域施設見学（１年） 進路探究ＷＥＥＫ 授業公開週間	関係教育委員会等 市役所、丹波医療センター等 チーたんの館、水分れフィールドミュージアム等 卒業生による講義、講演、模擬授業等
１０月	秋のオープン・ハイスクール	関係中学校、教育委員会等

1 1 月	全国コーディネーター研修	
1 2 月	福知山公立大学（田舎力甲子園）生徒発表 探究中間発表会 カリキュラム開発会議	福知山公立大学 関係機関等 福知山公立大学、関西学院大学、甲南大学、東京大学等
1 月	地域課題から世界を考える日 運営指導委員会	日頃の探究活動の成果を外部へ発表 学識経験者、関係行政機関等
2 月	探究発表会（県内外他校） （オンライン発表会も含む）	発表会実施校での発表（兵庫高校）
3 月	全国フォーラム 全国コーディネーター研修 学校運営協議会（コンソーシアム委員会）	 報告、意見聴取

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

年２回程度計画している運営指導委員会、コンソーシアム運営委員会において事業の進捗状況を確認する。その中で改善策を検討する。オンライン等も適切に活用して、確認できるようにする。

①生徒の成長の視点

グループ内での発表、学年での発表、発表会等において、課題へ取組みや視野の広まりが見られたか、また、生徒が発表する場が適切に設定されているかどうかを評価する。最終的に、地域課題の解決に積極的に取り組みたいと思うようになったかどうか、多様な価値観を持った人と関わって、学びたいと思うようになったかどうかなど生徒の変容を評価する。また、地域における探究的な学びを活かした進路実現がなされているのかを評価する必要がある。

②教員の資質向上

探究活動を効果的に進めるためには、コーディネーターの力を借りながら、教員自身の指導力の向上が図られなければならない。教科会、職員研修会等において、確認できるようにする。

週１回の探究担当者会議、月１回の探究推進委員会、教育課程委員会により進捗状況を確認しコーディネーターとともに事業の共通理解や調整ができるようにする。

③外部機関との連携

大学や関係機関との連携が適切に展開しているかをみる。特に、研究授業や発表会を適切に実施し、オンライン等も有効に活用して助言をいただく。コーディネーターにアドバスをもらいながら、一方の過度な負担にならず持続可能な形になっているかどうかという視点も持つ。

④中学生、保護者の視点

新たな学科が、生徒の成長、学校の発展につながり、柏原高校で学びたい、学ばせたいという魅力あるものになっているかどうかを評価する。

中学校での説明会、オープン・ハイスクール等でのアンケート結果やWEBページを活用した仕組みを検討する。

⑤カリキュラムマネジメントの視点

探究の授業だけで事業が完結するわけではない。学校の教育活動が効果的、機能的に連携しないと一部の教員の負担となる。その連携が図れているかをみる。学校全体が、新学科設置に向けての動きに想いを一致させていくことが必要である。将来的には、コーディネーターの視点を学校経営機能と融合できる仕組みを検討する。

６　成果の普及のための仕組み

○成果普及のための方策

①全国フォーラムでの発表

②県教委主催の各種研修会での先行事例として報告

③地域住民、保護者、中学生への広報、発表会等の活動

・ホームページへの掲載

・学校だより、探究通信(仮称)の発行

・探究活動発表会

・オープン・ハイスクール、出身中学校でのプレゼンテーション

・「地域課題から世界を考える日」

④大学等が実施する発表会、研究会への参加

⑤県民局主催丹波地域ビジョン推進委員会への参加

⑥全国、世界で活躍する卒業生を巻き込み、事業への理解と協力体制の構築

７　国の指定終了後の取組継続のための仕組み

○コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

地域社会学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりである。国の指定期間内で、それぞれの機関と更なる連携・協働を行い、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「地域全体の学び」となるよう更なる仕組みを構築する。

○コーディネーター機能の維持

指定期間後のコーディネーター機能の維持については、

①コーディネーター加配に関する予算の確保

②教員のコーディネーター機能の移行

③企業協力による人員配置　等

の方策を含めて、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に検討し、方向性を決定する。

地元自治体の「地域づくりセンター」から職員を派遣して、コーディネーターとして市内の高等学校を連携して活動することも視野に入れたい。